

みさごの鮎

泉鏡花作

—

「旦那さん、旦那さん。」

目と鼻の前に居ながら、大きな聲で女中が呼ぶのに、つい箸の手をとめた瘦形の、年配で——  
浴衣に貸廣袖を重ねたが——  
人品のいゝ客が、

「あゝ、何だい。」

「何うだね、おいしいかね。」

と額で顔を見て、其の女中はきよろりとしてゐる。  
客は餘り唐突なのに驚いたやうだつた。——

少い経験にしる、數の場合にしる、旅籠でも料理屋でも、給仕についたものから、こんな素朴な、實直な、しかも要するに猪突な質問を受けた事は嘗てない。  
い。

處で決して不味くはないから、

「あゝ、おいしいよ。」

と言つて又箸を付けた。

「そりや可い、北國一だろ。」

と洒落でもないやうで、納まつた眞顔である。

「むゝ、……まあ、然うでもないがね。」

と今度は客の方で顔を見た。目鼻立は十人

並……と言ふが人間並で、色が赤黒く、いか

にも壯健さうで、口許のしまつたは可いが、其の唇

の少し尖つた處が、化損つた狐のやうで、しかし不

氣味でなくて愛嬌がある。手織縞のごつ／＼した布

子に、よれ／＼の半襟で、唐縮緬の帯を不状に鳩胸

に高くしめて、髪はつい通りの束髪に結つて居る。

此を更めて見て客は氣がついた。先刻も一度其の

(北國一) を大聲で稱へて、裾短な脛を太く、

臀を振つて、ひよいと踊るやうに次の室の入口を隔

てた古い金屏風の陰へ飛出して行つたのが此の女中

らしい。

處で其の金屏風の繪が、極彩色の狩野の何某在銘

で、玄宗皇帝が同じ榻子に、楊貴妃ともたれ合つて、

笛を吹いて居る處だから餘程可らしい。

それは次のやうな場合であつた。

客が、加賀國山代温泉の此の近江屋へ着いたのは、當日午少し下る頃だつた。玄關へ立つと、面長で、柔和かな些とも氣取氣のない四十ぐらゐな――後で聞くと主人ださうで――質素な男が出迎へて、揉手をしながら、御逗留か、それとも一寸御入浴で、と訊いた時、客が、一晩お世話に、と言ふのを、腰を屈めつゝ畏つて、何うぞ此れへと、自分で荷物を捌いて、案内をしたのが此の奥の上段の間で次の室が二つまで着いてゐる。生憎宅は普請中のごさいますので、何かと不行届の儀は御容赦下さいまして、先づ御緩りと……と丁寧に挨拶をして立つと、其處へ茶を運んで來たのが、いま思ふと此の女中らしい。

實は小春日の明い街道から、衝と入つたのでは、人顔も容子も何も分らない。縁を廣く、張出しを深く取つた、古風で落着いただけに、十疊へ敷詰めた絨毯の模様も、谷へ落葉を積んだやうに見えて薄暗い。大きな床の間の三幅封も、濃い霧の中に、山が遙に、船もあり、朦朧として小さな仙人の影が映す

ばかりで、何の景色だか、これは燈が点いても判然  
分らなかつたくらゐである。が、庭は赤土に薄日が  
さして、塔形の高い石燈籠に、苔の眞蒼なさびがあ  
る。こゝに一樹、思ふまゝの松の枝ぶり、飛石に  
影を沈めて、颯と渡る風に静寂な水の響を流す。庭  
の正面がすぐに切立の崖で、ありのまゝの雑木林に  
萩つゝじの株、もみぢを交せて、片隅なる山笹の中  
を、細く蜿蜒ノノ自然の大巖を削つた徑が通じて、  
高く梢を上つた處に、建出しの二階、三階。はなれ  
家の座敷があつて、廊下が棧のやうに覗かれる。其  
のあたりからもみぢ葉越しに、駒鳥の囀るやうな、  
藝妓らしい女の聲がしたのであつたが――

入交つて、齒を染めた、陰氣な大年増が襖際へ來  
て、瓶掛に炭を繼いで、茶道具を揃へて銀瓶を掛け  
た。其處が水屋のやうに出來て居て、其から大廊下  
へ出入口に立てたのが件の金屏風。即ち玄宗と楊貴  
妃で、銀瓶は可いけれども。……次にまた浴  
衣に廣袖をかさねて持つて出た婦は、と見ると、赭  
ら顔で、太々とした乳母どんで、大縞のねんね子半  
纏で四つぐらゐな男の兒を負つたのが、どしりと絨

毯たんに坊主枕ぼうずまくらほどの膝ひざをつくと、半纏はんてんの肩かたから小兒こどもの顔かほを客きやくの方ほうへ揉もみだして、それ、小父せぢさんに（今日こんにちは）をなさいと、顔かほと一所いっしょに引傾ひきかたげた。

學士がくしが驚おどろいた。――客きやくは京きやうの某大學ぼうだいがくの佛語ふつこの教授けうで、榊三吉さかききちと云いふ學者がくしやなのだが、無心むしんの小兒こどもに向むかつては、盜賊たうぞくもあやすと言いふ。……教授けうじゆでも學者がくしやでも同じ事ことで、此これには莞爾にこ／＼として、はい、今日こんにちは、と言いつた。此この調子てうしで、薄暗うすぐらい廣間ひろまへ、思おもひのほかのものが顯あはれるから女中じよちゆうも一々いち／＼どれが何なんだか、一向いっかうにまとまりが着つかなかつたのである。

畫飯ひるの支度したくは、此この乳母うばどのに詔あづへて、それから浴室よくしつへ下りて一浴ひとあみした。……成程なるほど、屋の内うちは大普請おほぶしんらしい。大工左官だいくさくわんが其方そち此方こちを、眞畫間まひるまの夜よう討うちのやうに働はたく。……てうな、鋸のこぎり、鐵槌かねづちの賑にぎやかな音おと。――また遠とほく離はなれて、トン／＼トン／＼と俎まなを打うつのが、ひつそりと聞きえて飴いとする……。・と御馳走ごちそうに鶉つくみをたゝくな、とさもしい話はなしだが、四高かう（金澤しかづか）にしばらく居ゐたことがあつて、土地ちの時の物ときのものに豫備知識よびちしきのある學者がくしやだから、内々御ない／＼ご

馳走を期待しながら、門から敷石を細長く引込んだもとの大玄開を横に抜けて、廣廊下を渡ると、一段ぐつと高く上る。座敷の入口に、いかにも（上段の間）と札に記してある。で、金屏風の背後から謹んで座敷へ歸つたが、上段の室の客には些と不釣合な形に、脇息を横倒しに枕して、ごろんとながく成ると、瓶掛の火が、もみぢを焚いたやうに赫と赤く、銀瓶の湯氣が、すら／＼と楊貴妃を霞ませる。枕もとに松籟をきいて、しばらく理窟も學問もなくなつた。が、ふと、晝飯の膳に、一銚子添へさせるのを言忘れたのに心づいて、其處で起上つた。

何處を探しても呼鈴が見當らない。

二三度手を敲いて見たが――此は初めから成算がなかつた。勝手が十分に遠い。座敷の口へ出て、敲いて、敲きながら廊下を又一段下りた。

「これは驚いた。」  
更に應ずるものがなかつたのである。

一體、山代の温泉の此の近江屋は、大まかで、もの事おつとりして、いま式に餘り商賣にあせらない

旅館だと聞いて、甚だ嬉しくて来たのであるが、此では餘り大まか過ぎる。

何か、茸に酔つた坊さんが、山奥から里へ送出たと言つた形で、手をたゞき、たゞき、例の玄關の處へ出て、これなら聞えようと、又手を敲かうとする足許へ、衝立の陰から、ちよろり出たのは、今しがた乳母どのおぶはれて居た男の兒で、人なつツこ顔を見て莞爾々々する。

何うも、此の鼻尖で、ボン／＼は穩でない。  
仕方なしに、笑つて見せて、悄悄と座敷へ戻つて、

「あきらめろ。」  
で、所在なさに、金屏風の前へ畏つて、吸子に銀瓶の湯を注いで、茶でも一杯と思つた時、あの小兒にしてはと思ふ、大な蹠足が響いたので、顔を出して、むかうを見ると、小兒と一所に、玄關前で、ひよい／＼跳ねて居る女があつた。

「おゝい、姉さん、姉さん。」  
どか／＼どかと来て、

「旦那さんか、呼んだか。」

「あゝ、呼んだよ。」

と息を吐いて、

「どうにかしてくれ。――何處を探しても呼

鈴はなし、手をたゝいても聞えないし、――弱

つたよ。」

「あれ。」

と首も肩も、客を壓して、突込むやうに入つて來  
て、

「こんな大い内で、手を敲いたつて何が聞えるか  
ね。電話があるでねえか、それでお帳場を呼びなさ

いよ。」

「何處にある。」

「そら、其處にあるがね、見えねえかね。」

と客の前から、いきなり座敷へ飛込んで、突立状  
に指したのは、床の間傍の二子に据ゑた黒檀の机の  
上の立派な卓上電話であつた。

「あゝ、其かい。」

「これだあね。」

「私はまた眞個の電話かと思つて居た。」



「おゝ。」

と目を圓くして、きよろりと視て、

「眞個の電話ですがね。何處か間違つたところでも

あるのかよ。」

「いや、相濟まん、……間違つたのは私の

方だ。――成縛これで呼ぶんだな。――分

りました。」

「立派な仕掛だろがねえ。」

「立派な仕掛だ。」

「北國一だろ。」

「――それ、そこで言つて、ひよい／＼浮足で出て行く處を、背後から呼んで、一銚子を逃へた。」

「可いのゝを頼むよ。」

と追掛けに言ふと、

「分つた、分つた。」

と振り向いて合點々々をして、「北國一。」

と屏風の陰で腰を振つて、ひよいと出た。――

その北國一を、こゝで又聞いたのであつた。

「まあ、御飯をかへなさいよ。」

「あゝ．．．．．御飯もいまかへようが．．．．」

さて客は、いまので話の口が解けたと思ふらしい  
面色して、中やすみに猪口の酒を一口した。．．．

「．．．．．姐さん、此處の前を右へ出て、大な  
繪はがき屋だの、小料理屋だの、賑な處を通り抜け  
ると、舊街道のやうで、町家の揃つた處がある。あ  
れは何處へ行く道だね。」

「それはね、旦那さん、那谷から片山津の方へ行  
く道だよ。」

「然うかー！ 其處の中ほどに、さきが古道具  
屋と、手前が桐油菅笠屋の間に、一寸した紙屋があ  
るね。雑貨も商つて居る．．．．あれは何と言ふ  
家だい。」

「白粉や香水も賣つて居て、罐詰だの、石鹼箱は  
ぴか／＼するけど、じめ／＼とした、陰氣な、あれ

かあね。」

「全くだ、陰気な内だ。」

と言つて客は考へた。

「それは、旦那さん——あ、あ、あ、何屋とか言つたがね、忘れたよ。口まで出るけども。」

と給仕盆を鞆のやうに、とん／＼と膝を揺つて、

「治兵衛坊主の家ですだよ。」 「串戯ではない。

紙屋で治兵衛は洒落ではないのか。」

「何、人が皆然う言ふでね。本當の名だか何だか知らないけど、治兵衛坊主で直きと分るよ。旦那さん、知つて居なさるのかね、あの家を。」

客は、此より前、一寸買ものに出たのであつた。

——實は旅の事缺けに、半紙に不自由をしたので、帳場へ通じて取寄せようか、買ひに遣らうかとも思つたが、式の如き大まかさの、のんびりさの旅館であるから、北國一の電話で、呼寄せていひつけて、買ひに遣つて取寄せる隙に、一自分〔じぶん〕で買つて來る方が手取早い。……膳の來るに

も間があらう。然う思つたので帽子も被らないで、黙りで、ふいと出た。

直き町の角の煙草屋も見だし、繪葉がき屋も覗いたが、何うも其類のものが見當らない。小半町行き、一町行き・・・山の温泉の町がりの珍しさに、古道具屋の前に立つたり、松茸の香を利いたり、やがて一軒見附けたのが、其の陰氣な雜貨店であつた。浅い店で、横口の奥が山のかぶさつたやうに暗い。並べた巻紙の上包の色も褪せたが、ともしく重ねた半紙は戸棚の中に白かつた。「御免なさいよ、今日は、」と二三度聲を掛けたが返事をしない。しかしこんな事は、金澤の目貫の町の商店でも、経験のある人だから、氣短に其のまゝにしないで、「誰か居ませんか、」と、もう一度呼ぶと、「はい、」と其の時、媚かしい優しい聲がして、「はい、」と、すぐに重ね返事が、何うやら勢がなく、弱々しく聞えたと思ふと、舉動は早く棲を軽く急いだが、裾をはらりと、長襦袢の艶なのが、すら／＼と横歩きして、半襟も、色白な横顔も、少し俯向けるやうに、納戸から出て來たのが、ばつと

明るみへ立つと、肩から袖が悄れて見えて、温室のそれとは違つて、冷い穴藏から引出してもしたやうだつた、其の顔を背けたまゝ、「はい、何を差上げます。」と言ふ聲が沈んで、泣いて居たらしい片一方の目を、俯向けに、紅入友染の裏が浅葱の袖口で、ひつたり壓へた。

中脊で、もの柔かな女の、房り結つた島田が纏れて、おつとりした下ぶくれの頬にかゝつたのも、もの可哀で氣の毒であつた。が、用を言ふと、「はい、」と背後むきに、戸棚へ立つた時は、目を壓へた手を離して、すらりと成つたが、半紙を抽出して、立返る頭髪も重さうに褻さきの進びとゝもに、又うなだれて、堪兼ねた涙が、白く咲いた山茶花に霜の白粉の溶けるばかり、はら／＼と落つるのを、うつかり紙にうけて、……はつと思つたらしい。……其の拍子に、顔をかくすと、尚ほ濡れた。

うつかり渡さうとして、「まあ、」と氣づいたらしく、「あれ、取換へますから、」――

「いや、宜しい。・・・」

懷中へ取つて、ずっと出た。が、店を立離れてから、思ふと、あの、しをらしい女の涙ならば、此の袂に受けよう。口紅の色は残らぬが、瞳の影と、もに玉を包んだ半紙はこゝにある。――一寸は返事をしなかつたのも其の所爲だらう。不思議な處へ行合せた、と思ふうちに、いや、しかし、白山茶花の其の花片に、日の片あたりが淡くさすやうに、目が腫ぼつたく、殊に塵へた方の瞼の赤かつたのは、煩らつて居るのかも知れない。或は急に埃などが飛込んだ場合で、その痛み泣いて居たのかも分らない。――然うでなくて、如何に悲痛な折からでも、若い女が商ひに出てまで、客の前で紙を絞るほど涙を流すのは些と情に過ぎる。大方は目の煩ひだらう。

トラホームなぞだと困ると、其の涙をとにかく内側へ深く折込んだ、が。――やがて近江屋へ歸つて、敷石を奥へ入ると、酒の空樽、漬もの桶などがはみ出した、物置の戸口に、石屋が居て、コト

ノ、と石を切る音が、先刻期待した小鳥の骨を敲くのと同一であつた。

「――涙も此だ。」

と教授は思はず苦笑して、「しかし、其の方が僥倖だ。……」

今度は座敷に入つて、まだ坐るか坐らないに、金屏風の上から、ひよいと顔が出て、「腹が空いたろがね。」と言ふと、つか／＼と、入つて來たのが、こゝに居る此の女中で。小脇に威勢よく引抱へた黒塗の飯櫃を、客の膝の前へストンと置くと、一歩すさつたまゝで、突立つて、熟と顔を瞰下すから、此の時も吃驚した目を遣ると、兩手を引込めた布子の袖を、上下に、ひよこ／＼とゆさぶりながら、  
「給仕をするかね、」と言つたのである。

教授はあきらめて落着いて、

「おい／＼何うしてくれるんだ　――給仕にも

何にもまだ膳が來ないではないか。」

「あッさうだ。」

と慌てゝ片足を舉げたと思ふと、下して片足を又

上げたり、下げたり。

「腹が空いたるで、早くお飯を食はせようと思うたでね。急いたわいな、旦那さん。」

と、そのまゝ撥廻つたかと思ふと、

「北國一だ。」

と投げるやうに駈け出した。

酒は手酌が習慣だと言つて、漸つと御免を蒙つたが、はじめて落着いて、酒量の少い人物の、一銚子を、靜に、やがて傾けた頃、屏風の陰から、うかゞひ／＼、今度は妙に、おつかなびつくりと言つた形で入つて来て、あらためて又給仕についたのであつた。

話は前後したが、涙の半紙はこゝにあつた。客は何となく折を見て聞いたのである。

「いましがた一寸貫ものをして來たんだが、  
と言繼いで、

「彼家に、嫁さんか、娘さんか、きれいな女が居るだらう。」



「北國一だ。あはゝゝゝ。」

と、大聲でいきなり笑つた。

「まあ、北國一として置いて、何だい、娘か

い、嫁さんかい。」

また大聲で、

「押惚れたか。旦那さん。」

「驚かしなさんな。」

「吃驚しただろ、あの、別嬪に。……それ

だよ、それが小春さんだ。此の土地の藝妓でね、そ

れだで、雑貨店の若旦那を、治兵衛坊主と言ふだて

ば。」

「成程、紙屋——あの雑貨店の亭主だな。」

「若い人だ、活きるわ、死ぬるわと言ふ評判もの

だよ。」

「それで治兵衛……は分つたが、坊主とは

何うした譯かね。」

「何、旦那さん、癩癩持の、嫉妬やきで、はうづ

もねえ逆氣性でね、おまけに、しつこい、いんしん

不通だ。」

「何？……」

「隠元豆、田螺さあね。」

「分らない。」

「あれ、はゝゝ、いんきん、たむしだてば。」

「亂暴だなあ。」

「此の山代の湯ぐらゐでは埒あかねえさ、脚氣山中、かさ栗津の湯へ、七日湯治をしねえ事には半月十日寝られねえで、身體中搔痒つて、目が引釣り上る若旦那でね。おまけに、それが小春さんに、金子も、店も田地までも打込んでね。一時は、三月ばかりも、家へ入れて、かみさんにして置いた事もあつたがね。」

―― 初女房、花嫁ぶりの商ひは此で分つた ――

「ちやんと金子を突いたでねえから、抱へぬしの方で承知しねえだよ。摺つた揉んだの擧句が、小春さんは又褻を取つて居るだがね、一度女房にした女が、客商賣で出るもんだで、夜がふけてゞも見なさいよ、いら／＼して、逆氣上つて、痛棒い處を引搔いたくらゐでは埒あかねえで、田にしも隠元豆も地だんだを踏んで喰嚙るだよ。血は上づツても、性は陰氣で、ちり蓮華の長い顔が蒼しよびれて、しやくれてさ、それで負けじ魂で、張立てる治兵衛だから、

ひと  
人にもものさ言ふ時は、頭も唇も横町へつん曲るだ。  
のぼせて、頭ばつかり赫々と、するもんだで、小春  
さんのいゝ人で、色男がるくせに、頭髮さ、すべり  
と一分刈にして居る處で、治兵衛坊主、坊主治兵衛  
だ、なあ、旦那。」

慥くと聞けば、トラホーム、目の煩ひと思つたは  
恥かしい。袂に包んだ半紙の雲は、まさに山茶花の  
露である。

「旦那さん、何を考へて居なさるだね。」

「然うか。――先刻、買ものに寄つた時、其の藝妓は泣いて居たよ。」

「あれ、小春さんが坊主の店に居たゞかね。すいても嫌うても、氣立の優しいお妓だから、内證で逢ひに行つたゞろさ。――ほんに、もうお十夜だ

――氣むづかしい治兵衛の媪も、やかましい藝妓屋の親方たちも、ここ一日は講中で出入りがや／＼して居るで、其の隙に密と逢ひに行つたでしよ。」

「お安くないのだな。」

「何、いとうて泣いてるだか、しつこくて泣かされるだか、知れたものではないのだよ。」

「同じ事を……いとしい方にして置くが  
い。」

と客は、しめやかに言つた。

「厭な事だ。」

「大層嫌ふな。……其の執拗い、嫉妬深いのに、口説かれたらお前は何うする。」

「横びんた撲りこくるだ。」

「此は驚いた。」

「北國一だ。山代の巴板額だよ。四斗八升の米俵、  
両手で二俵提げるだよ。」

「偉い！……其の勢で、小春の味方をして

お遣り。」

「あゝ、すべいよ、旦那さんが言はつしやるな

ら。……」

「故と……聊かだけれど御祝儀だ。」

肩を振つて、拗ねたやうに、

「要らねえよ。……私こんなもの。……

旦那さん。……旅行さきで無駄な錢を遣はねえ

がいゝだ。そして……」

と顔を向け直すと、一寸上まぶたで客を視て、

「旦那さん、何時歸るかね。」

「いや、深切は難有いが、いま来たばかりのもの  
に、何時出程かは少し酷からう。」

「それでも、先刻来た時に、一晩泊だと言つたで

ねえかね。」

「眞個だ、明日は山中へ行くつもりだ。忙しい観

光團さ。」

「緩り居なされば可いに――では、またぎきに來なさいよ。」

と、眞顔で言つた。

客は其の言に感じたやうに、

「勿論來ようが、其の時、姐さんは居なからう。」

「あれ、何でえ？・・・」

「お嫁に行くから。」

したゝか頭を掉つて、

「うゝむ、行かねえ。」

「治兵衛坊主が、斷つて欲しいと言ふさうだ。」

「馬鹿を言ふもんでねえ。――治兵衛だら

うが、中兵衛だらうが、・・・一生嫁に行かね

えで待つてるだよ。」

「ぢやあ、一層、何處へも行かないで、何時まで

も此處に居ようか。私をお婿さんにしてくれゝ

ば。・・・」

「するともさ。」

「私は働きがないのだから、婿も養子だ。お前さん

養つてくれるかい。」

「あゝ、養ふよ。朝から晩まですきな時に湯に入

れて、御飯を食べさして、遊ぼして置けばそれでよ

からうがね。」

「勿體ないくらゐ、結構だな。」

「そのくらゐなら……私が働く給金でして進ぜるだ。」

「眞個かい。」

「それだがね、旦那さん。」

「御覽、それ、すぐに變替だ。」

「うゝむ、眞個だ、が、こんな上段の室では遣切れねえだ。――裏座敷の四疊半か六疊で、ふしようにして下さんせ、お膳の御馳走も、こんなにはつかねえが、我が内證で何うともするだよ。」

客は赤黒く、口の尖つた、にきびで肥つた顔を見つゝ、

「姐さん、名は何と言ふ。」

と笑つて聞いた。

「ふ、ふ、ふ。」と首を振つて居る。

「何と言ふよ。」

「措きなさい、そんな事。」

と耳朶まで眞赤にした。

「よ、眞個に何と言ふよ。」

「お光だ。」

と、飯櫃めしびつに太ふとい兩手りやうてを突張つゝばつて、ぴよいと尻しりを持もつ立てたる。遁構にげがまへで居あるのである。

「お光みつさんか、年とし紀しは。」

「知らない。」

「まあ、幾いくつ歳さいだい。」

「顔かほだ。」

「何なに、」

「私わたしの顔かほだよ、猿さるだてば。」

「すると、幾いくつ歳さいだつけな。」

「桃栗もくくり三年ねん、三歳みつつだよ、はゝゝ。」

と笑わらひながら駈かけ出した。此この顔かほが　　くどい

やうだが　　楊貴妃やうきひの上うへへ押おし並ならんで振向ふりむいて、

「二十はたちだ……融いたちだ……べべべべべべ

い　　」



四

こゝに、第九師團衛戍病院の白い分院がある。

――薬師寺、萬松園、春日山などゝ共に、療養

院は、山代の名勝に入つて居る。繪はがきがある。

御覽なさい。

病院にして名勝の繪に成つたのは、全國此處ばかりであらうも知れない。

此の日當りで暖かさうなが、青白い建ものゝ、門の前は、枯葉半ば、色づいた櫻の木が七八株、一列に植ゑたのを境に、もう温泉の町も場末のはづれで、道が一坂小だかく成つて、三方は見通しの原で、東に一帶の薬師山の下が、幅の廣い畷に成る。桂谷と言ふのへ通ずる街道である。病院の背後を劃つて、蜿々と続いた松まじりの雑木山は、畠を隔てたばかり目の前に近いから、遠い山も、峻しい嶺も遮られる。ために景色が穏かで、空も優しい。眞綿のやうに處々白い雲を刷いたおつとりとした青空で、やゝ斜な陽が、何處となく立渡る初冬の霧に包まれて、ほんのりと輝いて、光は弱いが、まともに照らされ

ては、のぼせるほどの暖かさ。が、陰の袖は、そゞ  
るに 冷い。

其の近山の裾は半ば陰つたが、病院とは向う合せ  
に、此の暖から少し低く、下りめに成つて、陽の一  
杯に當る枯草の路が、ちよる／＼とついで、其の徑  
と、罅の交叉點がゆるく三角に成つて、十坪ばかり  
の畑が一枚。見霽の野山の中に一つある。一方が廣々  
とした刈田との境に、垣根もあつたらしいが、竹も  
塀もこはれ／＼で、朽ちた杭ばかり一本、せめて案  
山子にでも化けたさうに灰色に残つて、尾花が、ぼ  
うと消えさうに、しかし陽を満々と吸つて、あ、あ、  
長閑な欠伸でも出さうに、其の杭に凭れて居る。藁  
が散り、木の葉が亂れた畑には、こゝらあたり盛に  
植ゑる、杓子菜と云つて、株の白い處が似て居るか  
ら、蓮華菜とも言ふのを、もう散々に引棄てたあと  
へ、陽氣が暖だから、乾いた土の、ほか／＼ともり  
あがつた處へ、細く青く芽をふいた。

畑の裾は、町裏の、ごみ／＼した町家、農家が入  
亂れて、樹立がぐれに、小流を包んで、ずっと遠く

續いたのは、山中道で、其處は雲の加減で、陽が薄  
赤く颯と射す。

色も空も一定みする、此の日溜りの三角畑の上は  
かり、雲の瀬に紅の葉が柵むやうに、夥多しく赤蜻  
蛉が群れて居た。―― 出會つたり、別れたり、  
上下にスツと飛んだり。あの、紅また薄紅、うつく  
しい小さな天女の、水晶の翼は、きら／＼と輝くの  
だけれど、もう冬で・・・遊びも闌に、恍惚  
したらしく、夢をニニふやうに、ふは／＼と浮きつ、  
沈みつ、漾ひつ。で、時々目がさめたやうに、バツ  
と羽を光らせるが、又ぼうと成つて、暖かに霞んで  
飛交ふ。

日南の虹の姫たちである。

風情に見惚れて、近江屋の客は唯一人、三角畑の  
角に立つて、山を背に繞らしつゝ、インで居るのであ  
つた。

四邊の長閑かさ。しかし静な事は―― 晝飯を  
濟せてから―― 買ものに出た時とは反對の方

に　　ー　　そゞろ歩行でぶらりと出て、温泉の廓を  
一巡り、店さきのきらびやかな九谷焼、奥深く彩つ  
た漆器店。両側の商店が、やがて片側に成つて、媚  
かしい、紅から格子を五六軒見たあとは、細流が流  
れて、薬師山を一方に、呉羽神社の大鳥居前を過ぎ  
たあたりから、往來ふ人も、來る人も、なく成つて、  
古ぼけた酒店の杉葉の下に、茶と黒と、鞠の伸びた  
ほどの小犬が、上に成り下に成り、おつとりと耳を  
噛んだり、ちよいと鼻づらを引かき合つたり。・  
・・此を見ると、羨ましいか、桶の蔭から、むく  
と起きて、脚をひろげて、もう一匹よち／＼と、同  
じやうな小狗は出て來ても、村の閑寂間か、棒切持  
つた小兒も居ない。

で、こゝへ來た時。・・・前途山の下から、頬  
被りした脊の高い草鞋ばきの親仁が、柄の長い鎌を  
片手に、水だか酒だか、繩からげの一升鑊をぶら下  
げたのか、てくり／＼と、躑を傳ひ、松茸の香を芬  
とさせて、蛇の莫蔭と稱ふる、裏白の葉を堆く装つ  
た大籠を背負つたのを、一ツゆすつて通過ぎた。う  
しろ形も、鑊と鎌で調子を取つて、大手通振つた、

おのづから意氣の揚々とした處は、山の幸を得た誇  
を示す。……籠に、あの、ばさ／＼群つた葉  
の中に、鯰のやうな、小鮒のやうな、頭の大な茸が  
ぴち／＼跳ねて居さうなのが、温泉の町の方へずつ  
と入つた。少時、人に逢つたのはそればかりであつ  
た。

客は、陽の赤蜻蛉に見惚れた瞳を、ふと、烟際  
の尾花に映すと、蔭の片袖が悚然とした。一度、しか  
としめて拱いた腕を解いて、やゝ震へる手さきを、  
小鬢に密と觸れると、喟然として面を暗うしたので  
あつた。

日南に霜が散つたやうに、鬢にちら／＼と白髪が  
見える。爾時、赤蜻蛉の色の眞紅なのが忘れたやう  
にスツと下りて、尾花の下に、杭の尖に留つ  
た。……一度伏せた羽を、衝と張つた、きら  
りと輝かした時、あの緑の目を、一寸此方へ振動か  
した。

小狗の戯にも可懐んだ。幼心に返つたのである。

教授は、ほどびるが如き笑顔に成つた。が、きりりと唇をしめると、眞黒な厚い大な外套の、背腰を屁びりに屈めて、及腰に右の片手を伸しつゝ、密と狙つて寄つた。が、何うして何うして、小兒のやうに軽く行かない。ぎくり、しやくり、いまが大切・・・よちりと飛附く。・・・南無三寶、赤蜻蛉は颯と外れた。はつと思つた時である。

「おばゝゝゝ。はゝゝゝは。」  
花々しく調子高に、若い女の笑聲が響いた。

向うに狗兒の影も、早や見えぬ。四邊に誰も居ないのを、一息の下に見渡して、我を笑ふと心着いた時、咄嗟に澁面を造つて、身を捻ぢるやうに振向くと

此の三角畑の裾の樹立から、廣野の中に、もう一條、罨と傾斜面の廣き苅田を隔てゝ、突當りの山裾へ畦道があるのが屏風の如く連つた、長く、丈の高い掛稻のづらりと續いたのに蔽はれて、半ばで消えるので氣がつかなくつた。掛稻のきれ目を見ると、遠山の雪の頂が青空にほとばしつて、白い兔が月に

駈けるやうである。下も水の如く、尾花の波が白く敷く。苳残した粟の穂の黄色なものと段々に成つて、立蔽ふ青い霧に浮いて居た。

と見向いた時、畦の嫁菜を褌にして、其の掛稻の此方に、目も遙な野原苳田を背にして間が離れて確とは見えぬが、薄藍の淺葱の襟して、髪 of 艶かな、色の白い女が居て、いま見合せた顔を、急に背けるや否や、たゞきつけるやうに片袖を口に當てたが、聲は高々と、澄切つた空を、野に響いた。

「おほゝゝゝゝ、おほゝゝゝゝ、おほゝゝゝゝ。」

おや、顔に何かついて居る？・・・すべりを扱いて、思はず撫でると、これがまた化かされものが狐に對する眉毛に唾と見えたらう。

金切聲で、「ほゝゝほゝゝ。」

十歩ばかり先に立つて、一人男の連が居た。縞がらは分らないが、くすんだ装で、青磁色の中折帽を前のめりにした小造な、瘦せた、形の粘々とした男であつた。此が、其の晴やかな大笑の笑聲に驚いた

やうに立留つて、廂睨みに、女を見て居る。

何を笑ふ、教授は、また……此は此の陽氣に外套を着たのが可笑いのであらうと思つた……  
・言ふまでもない。――途中でな、誰を見ても、若いものにも、老人にも、外套を着たものは一人もなかつた。湯の廓は皆柳の中を廣袖で出歩行く。勢なのは浴衣一枚、裸體も見えた。尤も宿を出る時、外套はと氣がさしたが、借りて着込んだ浴衣の糊が硬々と突張つて、廣袖の膚につかないのが、悪く風を通して、ぞく／＼するため、すつぽりと着込んで居るのである。成程、唯一人、帽子も外套も眞黒に、畑に、つゝくりと立つた處は、影法師に狐が憑いたやうで、禪をぶら下げて裸で陸に立つたより、わかい女には可笑しからう

否、蜻蛉釣だ。

あゝ、それだ。

小鬢に霜のわれらがと、忽ち心着いて、思はず、禁ぜざる苦笑を洩すと、其の顔が又合つた。

「ぷツ、」と噴出すやうに更に笑つた女が、堪



らぬと言つた體に、裾をばツノと、もとの方へ、  
五歩六歩駈戻つて、捻ぢたやうに胸を折つて、

「おほゝゝほ。」

胸を反して、仰向けに、

「あはゝゝは。」

忽ちくるりとうしろ向きに、何か、もみぢの散り  
かゝる小紋の羽織の背筋を見せて、向うむきに、雪  
の遠山へ、やたらに叩頭をする姿で、うつむいて、

「おほゝ、あはゝ、あはゝゝゝは。あはゝゝ

はゝ。」

やがて、朱鷺色の手巾で口を蔽うて、肩で呼吸し  
て、向直つて、ツンと澄して横顔で歩行かうとした。  
が、何と、自から目が此方に向くではないか。二つ  
三つ手巾に、すぶりをくれて、たゞきつけて、又笑  
つた。

「おほゝゝゝ、あはゝゝゝ、あはゝゝゝは。」

入口を洩る紅に、腕の白さのちらめくのを、振つ  
て揉んで身悶する。

きよると立つた連の男が、一步返して、壓へる如くに、握拳をぬつと突出すと、今度は其の顔を屈み腰に仰向いて見て、其にも、したゝかに笑つたが、又もや目を教授に向けた。

教授も堪へず、ひとり寂しくニヤ／＼としながら、半ば茫然として立つて居たが、餘わの事に、其處で、うつかり、べかつこを遣つたと思へ。

「きやつ、ひいッ。」と逆に半身を折つて、前へ折曲げて、脾腹を腕で壓へたが追着かない。身を悶え、肩を揉み揉みへと／＼に成つたらしい。・・・畦の端の革もみぢに、だらしなく膝をついた。半襟の藍に嫁菜が咲いて、

「おほゝゝゝほゝ、あはゝゝゝ、おほゝゝゝほ。」

其處を兩脇、乳も、胸も、もぞ／＼と尾花が攪る！  
はだかる襟の白さを合すと、合す隙に、しどけない膝小僧の雪を敷く。島田鬚も、切も、はら／＼と成つて、

「堪忍してよう、おほゝゝほ、あはゝゝゝはゝ。」

と、手をふるはずみに、鳴子繩に、くひつくばかり、犇と縋ると、苅田の鳴子が、山に響いてから／＼から、から／＼から／＼。

「あは／＼は／＼。おほ／＼ほ／＼。」

勃然とした體で、島田の上で、握拳の兩手を、一度打擲をする如くふつて見せて、むつとして男が行くので、はあ／＼膝を摺らし、腰を引いて、背には波を打たしながら、身を蜿らせて、漸と立つて、女は褌を引合せ状に振向くと、一寸小腰を屈めながら、教授に會釋をするが疾いか。

「きやあー」と笑つて、衝と駈け状に、男のあとを掛稻の背後へ隠れた。

其の掛稻は、一杯の陽の光と、溢れるばかり雀を吸つて、むく／＼として、音のするほど膨れ上つて、尚ほ堪へず、おほ／＼ほ、笑聲を吸込んで、遣切れなく成つて、はち切れたり稻穂がゆさゆさと一齊に揺れたと思ふと、女の顔がぼつと出て、髪を黒く、唇を紅く、

「おほ／＼ほ／＼、あは／＼は／＼。」

「白痴奴、汝！」

ねつい、怒った聲が響くと同時に、ハツとして、  
舊の路へ遁げ出した女の背に、つかみかゝる男の手  
が、伸びつゝ届くを、躲さうとしたのが、眞横には  
つたり。

伸しかゝると、二ツ三ツ、ものをも言はずに、頬  
とも言はず、肩とも言はず、男の拳が、尾花の穂が  
へし折れるやうに見えて打擲した。

顔も、髪も、土まみれに、眞白な手を袖口から、  
ひしと合せて、をがんで縋つて、起きようとす、  
腕を拂つて、男が足を上げて一つ蹴た。

瞬くばかりの間である。

「何を、何を。」

たかが山家の戀である。男女の痴話の傍杖より、  
今は、高き天、廣き世を持つ、學士榊三吉も、むか  
し、一高で骨を鍛へた向陵の健兄の意氣は衰へず、



「御免なすつて、旦那さん、赤蜻蛉をつかまへよ  
うと遊ばした、貴方の、貴方の形が、餘り……  
餘り……おほ……」

「いや、我ながら、思へば可笑しい。笑ふのは當  
り前だ。が、氣の毒だ。連の男は何と言ふ亂暴だ。」

「え、家では却つて人目に立つつて、あの、お  
ほ、心中の相談をしに來た處だものですから、あ  
は……」

ひたと胸に、顔をうづめて、泣きながら、「お  
ほ……」

「旦那さん、そんなら、あの、私、．．．．死  
なずと大事ごさいませんか．．．．」

「．．．言ふだけの事はないよ、．．．まる  
ツ切、お前さんが慾ばかりでだましたので見た處  
で．．．此方は藝妓だ。罪も報もあるものか。  
それに聞けば、今までに出来るだけは、人情も義理  
も、苦勞をし抜いて盡して居るんだ。．．．勝  
手な極道とか、遊蕩とかで行留りに成つた男の、名  
は體のいゝ心中だが、死んで行く道連れにされて堪  
るものではない。．．．その上、一人身ではない  
さうだ。．．．こゝへ来る途中で俄盲目の爺さん  
に逢つて、おなじやうな目の悪い父親があると言つ  
て泣いたぢやないか。．．．」

掛稻、嫁菜の、畦に倒れて、この五尺の松に縋つ  
て立つた、山代の小春を、近江屋へ連戻つた事は、  
すぐに頷かれよう。藝妓である。其のまゝ伴つて來  
るのに、何の仔細もなかつたこともまた斷るに及ぶ

まい。

尚ほ聞けば、心中は、單に相談ばかりではない。  
恚うした場所と、身の上では、夜中よりも人目に立  
たない、静な日南の隙を計つて、岐路をあれからす  
ぐ、桂谷へ行くと、淨行寺と云ふ門徒宗が男の  
寺。・・・其處で宵の間に死ぬつもりで、對手  
の袂には、商ものゝ、（何とか入らず）と、懷  
中には小刀さへ用意して居たと言ふのである。

上前の摺下る・・・腹帯の弛んだのを、氣に  
しい／＼、片手でほつれ毛を搔きながら、少しあと  
へ退つてついて来る小春の姿は、道行から遁げたと  
よりは、山奥の人身御供から助出されたものゝやう  
であつた。

左山中道、右桂谷道、と道程標の立つた追分へ來  
ると、一ー其の山中道の方から、脊のひよるひ  
よるとした、頤の尖つた、瘦せこけた爺さんの、菅  
の一もんじ笠を眞直に首に据ゑて、腰に風呂敷包を  
ぐらつかせたのが、すあしに破脚絆、草鞋穿で、と



ぼ／＼と竹の杖に曳かれて來たのがあつた。

此の竹の杖を宙に取つて、さきを握つて、前へも立たず横添に導きつゝ、くたびれ脚を引摺つたのは、目も耳もかくれるやうな大な鳥打帽の古いのをかぶつた、八つぐらゐの男の兒で。これも風呂敷包を中結へして西行背負に背負つて居たが、道中へ、弱々と出て來たので、横に引張合つた杖が、一方通せん坊に成つて、道程標の辻の處で、教授は足を留めて前へ通した。が、細流は、これから流れ、鳥居は、これから見え、町もこれから賑かだけれど、俄めくらと見えて、突立つた足を、こぶらに力を入れて、あげたり、すばめたりするやうに、片手を差出して、手探りで、巾着ほどな小兒に杖を曳かれて辿る状。いま生命びろひをした女でない、あの手を曳いて、と小春に言つて見たいほど、山家の冬は、此の影よりにして、町も、軒も、水も、鳥居も暗く黄昏れた。

駒下駄のちよこ／＼あるきに、石段下、其の呉羽の神の鳥居の蔭から、桃割ぬれた結立で、緋鹿子の角紋り。簪をまださゝず、黒繻子の襟の白粉垢の冷

たさうな、かすりの不斷着をあはれに着て、  
・前垂と帯の間へ、古風に手拭を細く挟んだ雛妓  
が、殊勝にも、お参詣の戻らしい・  
に、つゝと出た。が、盲目の爺さんとすれ違つて  
前へ出たと思ふと、空から抱留められたやうに、ひ  
たりと立留つて振向いた。

「や、姉ちゃん。」と小兒が飛着く。

見る／＼うちに、雛妓の、水晶のやうな二つた目  
は、一杯の涙である。

小春は密と寄添うた。

「姉ちゃん、お父ちゃんが、お父ちゃんが、目が  
見えなく成るから、一寸姉ちゃんを見て  
えつてなあ。」

西行背負の風呂敷づゝみを、肩の方から、いぢけ  
たやうに見せながら、

「姉ちゃん、大すきな豆の餅を持って来た。」

ものも言ひ得ず、姉さんは、弟の其の頭を撫でる  
と、仰いで笠の裡を熟と視た。其の笠を被つて立て  
る状は、かゝる苦界にある娘に、あはれな、みじめ  
な、見すばらしい俄盲目には見えないで、しなびた

地藏菩薩のやうであつた。

親仁は抱しめもしたさうに、手探りに出した手を、火傷したかと慌てゝ引いて、其の手を片手をがみに、あたりを拝んで、誰ともなしに叩頭をして、

「御免下され、御免下され。」  
と言つた。

「正念寺様におまゐりをして、それから木賃へ行  
くさうです。いま参りましたのは、あの妓が一  
寸……やかたへ連れて行きましたの。」

突當らしいが、横町を、其の三人が曲りしなに、  
小春が行きすがりに、雛妓と囁いて「のちにえ。」  
と言つて別れに、さて教授に然う言つた。

「……来た途中の俄盲目は、此である。――  
やがて、近江屋の座敷では、小春を客分に扱つて、  
膳を並べて、教授が懇に説いたのであつた。」

「……眞個に私、死ななくても大事ござい

ませんわね。」

「死んで堪るものか、死ぬ方が間違つてるんだ。」

「でも、旦那さん、……義理も、人情も知らない女だ、薄情だと、言はれようかと、そればかりが苦に成りました。もう人が何と言ひませうと、旦那さんのお言ばかりで、どんなに、あの人から責められましても私はきつぱりと、心中なんか厭だと言ひます。お底さまで助りました。また此で親兄弟のいとしい顔も見られません。もう、此の一年ばかり此方と言ひますもの、朝に晩に泣いてばかり、生きた瀬はなかつたのです。——その苦みも抜けました。貴方は神様です。佛様です。」

「いや、これが神様や佛様だと、赤蜻蛉の形をして居るのだ。」

「おほ。」

「あゝ、眞個に笑つたな——もう可し、決して死ぬんぢやないよ。」

「たとひ間違つて居りましても、貴方のお言ばかりで活きます。女の道に缺けたと言はれ、薄情だ、賣女だと言ふ人がありましても、……口に出

しては言ひませんけれど、心では、貴方のお言葉ゆゑと、安心をいたします。」

「敢て構はない。此の俺が、私と言ふものが、死ぬなど言つたから死なないと、構はず言へ。――

言つたつて決して構はん。」

「いゝえ、勿體ない、お名ふだもおねだり申して頂きました。人には言ひはしませんが、まあ、嬉しい。……嬉しいうございますわ。――旦那さん。」

「……」

「あの、それですけれど……安心をしましたせみですか、落膽して、力が抜けて。何ですか、餘り身體にたわいがなくなつて、心細く成りました。おそばへ寄せて下さいまし……こんな時でございませんと、思ひ切つて、お顔が見られないのでございませけど、それでも、やつぱり、暗くて見えはしませんわ。」

と、膝に密と手を置いて、振仰いだらしい顔がほの白い。艶濃き髪の薫より、眉がほんのりと香ひさうに、近々とありながら、上段の間は、いま殆ど眞暗である。

實は、さきに小春を連れて、此の旅館へ歸つた頃に、廊下を歩行き馴れた此の女が、手を取つたほど早や暗くて、座敷も辛じて黑白の分るくらゐであつた。金屏風とむきあつた、客の脱すてを掛けた衣桁の下に、何をして居たか、つぐんで居て、道陸神のやうな影を、ふら／＼と動かして、ぬいと出たものがあつた。あれと言つた小春と、ぎよつとした教授に「北國一。」と浴せ掛けて、また／＼間に廊下をすつ飛んで行つたのは、あのお光であつたが。

直に小春が、客の意を得て、例の卓上電話で、二人の膳を帳場に通すと、今度註文をうけに出たのは、以前の、齒を染めた寂しい婦で、しよんぼりと起居をするのが、何だか、産女鳥のやうに見えたほど、――時間は然までもなかつたが、わけて此の座敷は陰氣だつた。

頼もしいほど、陽氣に賑かなのは、廂はづれに欄干の見える、崖の上の張出しの座敷で、客も大勢ら

しい、四五人の、藝妓の、いろ／＼な聲に、客のが  
まじつて、唄ふ、弾く、踊つて居た。

船の舳の出たやうに、もう一座敷重つて、其處に  
も三味線の音がしたが、時々哄と笑ふ聲は、天狗が  
笏を返すやうに、崖下の庭は暮れるものを、何時ま  
でも電燈がつかない。

小春の藍の淡い襟、冷い島田が、幾度も、縁を覗  
いて、ともに燈を待ちもした。

此の縁の突當りに、上敷を板に敷込んだ、後架が  
あつて、機械口の水も爽だつたのに、其の暗紛れに、  
教授が入つた時は、一滴の手水も出なかつたので、  
小春に言ふと、電話までもなく、帳場へ急いで、少  
時して、眞鍮の水ざしを持つて来て言ふのには、手  
水は發動機で波上げて居る處、發電池に故障があつ  
て、電燈もそのために後れると、帳場で言つて居る  
さうで。其處で中縁の土間の大きな石の手水鉢、たゞ  
し落葉が二三枚、不思議に燈籠に火を點したやうに  
見えて、から／＼に乾いて水はない。其處へ誘つて、  
つき膝で、灘になまめかしく颯と流してくれて、

「あれ、はんけちを田圃道で落して来て、・・・

・・・

「それも死神の風呂敷だつたよ。」

「可恐いわ、旦那さん。」

其の水さしが、さて・・・いま矢張り、手水鉢の端に据つて居るのが幽に見える。夕暮の鷺が長い嘴で留つたやうで、何となく、水の音も、ひた／＼とするやうだつたが、此の時、木兎のやうに成つて、とつぷりと暮れて眞暗だつた。

「何うした、何うした。・・・おゝ、泣いてゐるのか。――私は・・・」

「あゝれ、旦那さん。」

と、厠の板戸を、内から細目に、小春の姿が消えさうに、

「私、つい、つい、うつかりして、あのお恥かしくつて泣くんですわ・・・此處には水がありません。」



「然うか。」

と教授が我が手で、其の戸を開けてやりつゝ、  
「此方へお出で、かけて遣らう。さ。」

「は。」

「可いか、十分に……」

「あれ、何うしませう、勿體ない、私は罰が當り  
ます。」

懷紙に二階の影が散る。……高き廊下をち  
ら／＼と燭臺の火が、其の高樓の欄干を流れた。

「罰の當つたは此の方だ。――しかし、婦人

の手に水をかけたのは生れてからはじめてだ。赤ん  
坊になつたから、見ておくれ。お庇で白髪が皆消え  
て、眞黒に成つたらう。」

まことに髪が黒かつた。教授の顔の明るさ。

「此の手水鉢は、實盛の首洗の池も同じだね。」

「えゝ、縁起でもない、旦那さん。」

「ま、姦通め。うゝむ、おどれ等。」

「北國一だ。……危えよ。」

殺した聲と、呻く聲で、どたばた、どしんと音が  
すると、萬歳と、向二階で喝采、ともる聲に喚いた

のと殆ど一所に、赤い電燈が、蒟蒻のやうにふる／＼と震へて點いた。

小春の身を、背に庇つて立つた教授が、見ると、  
 繻子の黒足袋の鼻緒ずれに破れた奴を、ばた／＼と  
 空に撥ねる、治兵衛坊主を眞俯向けに、押伏せて、  
 お光が赤蕪のやうな膝をはだけて、のしかゝつて居  
 るのである。

「危い——刃ものを持つてるぞ。」

絨毯を縫ひながら、治兵衛の手の大小刀が、しか  
 し赤黒い電燈に、錆蜈蚣のやうに蠢くのを、事とも  
 しないで、

「何が、犬にも牙がありや、牛にも角があるだあ  
 ね。こんな人間の刃ものなんぞ、何うするかね。此  
 の馬鹿野郎。それでも私が来ねえと、大事なお客さ  
 んに怪我をさせる處だつけ。飛んでもねえ嫉妬野郎  
 だ。大い聲を出してお帳場を呼ばうかね、旦那さん、  
 何うするかね。私が一つ横ずつぼう撲りこくつて遣ら  
 うかね。」

「あゝ、靜に——亂暴をしちや不可い。」

教授は敷居へ、内へ向けて引きながら、縁側の簾梅子に掛けた。

「君は、誰を斬るつもりかね。」

「うむ、汝から先に……・・・・・當前ぢやい。うむ、放せ、口惜いわい。」

「迷惑をするぢやあないか。旅の客が湯治場の藝妓を呼んで遊んだが、それが何うした。」

「汝、俺の店まで、呼出しに、汝、逢曳にうせを つて、姦通め。」

「血迷ふな、誤解は何うでも構はないが、君は卑劣だよ。……・・・・・便つた金子に世の中が行詰つて、自分で死ぬのは、間違ひにしる、勝手だが、死ぬのに一人死ねないで、未練にも相手の女を道づれにしようとして附絡ふのは卑劣ぢやあないか。――  
投出す生命に女の連を拵へようとするしみつたれさは何うだ。出した祝儀に、利息を取るよりけちな男だ。君、可愛い女と一所に居る時は、蚤が一つ餘計に女にたかつて、あゝ、おれの身をかはりに吸へ、可哀相だと思ふが情だ。涼しい時に蟲が鳴いても、

かぜを引くなよ、寝冷をするなと念じて遣るのが男  
ぢやないか。――自分で死ぬほど、要らぬ生命  
を持つて居るなら、おなじ苦勞をした女の、壽命の  
さきへ、鼻毛をよつて、繼足をして遣るが可い。此  
のうつくしい、優しい女を殺さうとは何事だ。これ  
聞け。俺も、こんな口を利いたつて、些とも偉い男  
ではない。お互に人間の中の蟲だ。――蟲だが、  
書物ばかり食つて居る、しみのやうな蟲だから、失  
禮ながら君よりは、清潔だよ。それさへ……  
それでさへ、聞けよ。――心中の相談をして居  
る時に、おやぢが蜻蛉釣る形の可笑さに、道端へ笑  
ひ倒れる妙齡の氣の若さ……今もだ……  
うつかり手水に行つて、手を洗ふ水がないと言つて、  
戸を開け得ない、きれいな女と感じた時は、娘のや  
うな可愛さに、唇の觸つたばかりでも。」

「うゝむ、うゝむ。」と呻つた。

「申諱のなさに五體が震へる。何だ、其の女に對  
して、隠元、田螺の分際で、薄汚い。いろも、亭主  
も、心中も、殺すも、活すもあるものか。――

静しづかにこゝを引揚ひきあげて、早はやく粟津あはづの湯ゆへ入はいれ　―  
自分じぶんにも二ふたつはあるまい、生命いのちの養生やうじやうをするが可い  
い。

「餓鬼がきめが、畜生ちくじやう！」

「おつと、どつこい。」

「うむ、放はなせ。」

「姐ねえさん、放はなしてお遣やり。」

「危あぶなえ、旦那だんなさん。」

「いや、私わたしはまだ其その人ひとに、殺ころされも、斬きられも

しさうな氣きはしない。お放はなし。」

「おゝ、尤もつともな、私わたしがこの手てを押おさへて居ゐるで、何ど

うする事ことも出で来きはしねえだ。」

「さあ、胸むねを出だせ、袖そでを開あける。私わたしは指ゆび一つ壓おさへ

て居ゐない。婦人をんなが起たつて其處そこへ縋すがれば、話はなしは別べつだ。

桂清水かつらしみづとか言いふので顔かほを洗あらつて私わたしも出直でなほす　―

それ、それ、見みたが可いい。婦人をんなは、何どうだ、椅子いすの

陰かげへ小ちひさく隠かくれて、身みを震ふるはして居ゐるぢやあないか。

― 歸かへりたまへ。」

また電燈でんとうが、滅ほろびるやうに、呼い吸きをひいて、すつ

と消えた。

「二人とも覚えてけつかれ。」

「此の野郎、何處から入つた。あゝ、―― 然

うか。三疊の窓を潜つて、小こい、庭境の隣家の塀

から入つたな。争はれぬもんだつてば。・・・

入つた處から出て行くだからな。壁を摺つて、窓を

這つて、あれ板塀にひつゝいた、とかげ野郎。」

小春は花のいきするやうに、たゞ教授の背後から、

帯に縋つて、さめ／＼と泣いて居た。

此處の湯の廓の柳がいゝ。分けて今宵は月夜である。五株、六株、七株、すら／＼と立ち長く靡いて、しつとりと、見附を繞つて向合ふ湯宿が、皆此の葉越に窺はれる。どれも赤い柱、白い壁が、十五間々口、十間々口、八間々口、大きな（舎）と言ふ字をさながらに、湯煙の薄い胡粉でぼかして、月影に浮いて居て、甍の露も紫に凝るばかり、中空に冴えた月ながら、氣の暖かさに臃である。そして裏に立つ山に湧き、處々に透く細い町に霧が流れて、電燈の蒼い砂子を鏤めた景色は、廣重がピラミツドの夢を描いたやうである。

柳のもとには、二つ三つ用心水の、石で龜甲に圍つた水溜の池がある。が、涸れて、寂しく、雲も星も宿らないで、一面に散込んだ柳の葉に、山谷の落葉を誘つて、塚を築いたやうに見える。とすれば月が覗く。・・・覗くと、光がちら／＼とさすので、水があるのを知つて、影が光る、柳も化粧をするのである。分けて今年は暖さに枝垂れた黒髪は尚



ほ濃<sup>じゆ</sup>かで、中<sup>なか</sup>にも眞<sup>ま</sup>中に、月<sup>げつ</sup>光<sup>くわう</sup>を浴<sup>あ</sup>びて漆<sup>しゆ</sup>のやうに  
高<sup>たか</sup>く立<sup>た</sup>つた火<sup>ひ</sup>の見<sup>み</sup>階<sup>はし</sup>子<sup>ご</sup>に、袖<sup>そで</sup>を掛<sup>か</sup>けた柳<sup>やなぎ</sup>の一本<sup>ひともと</sup>は瑠<sup>る</sup>  
璃<sup>てんじやう</sup>天井<sup>う</sup>の階<sup>はし</sup>子<sup>ご</sup>段<sup>だん</sup>に、遊<sup>い</sup>女<sup>うぢよ</sup>の凭<sup>もた</sup>れた風<sup>ふ</sup>情<sup>ぜい</sup>がある。

此<sup>こ</sup>のあたりを、ちらほらと、そゞろ歩<sup>あ</sup>行<sup>る</sup>の人<sup>ひと</sup>通<sup>とほ</sup>り。  
見<sup>み</sup>附<sup>つけ</sup>正<sup>しやう</sup>面<sup>めん</sup>の總<sup>そう</sup>湯<sup>ゆ</sup>の門<sup>もん</sup>には、淺<sup>あ</sup>葱<sup>さき</sup>に、紺<sup>こん</sup>に、茶<sup>ちや</sup>の旗<sup>はた</sup>が、  
納<sup>をさめてぬく</sup>手<sup>て</sup>拭<sup>ぬぐ</sup>のやうに立<sup>た</sup>つて、湯<sup>ゆ</sup>の中<sup>なか</sup>は祭<sup>まつ</sup>禮<sup>り</sup>かと思<sup>おも</sup>ふ人<sup>ひと</sup>聾<sup>とふ</sup>の、女<sup>をんな</sup>まじりの賑<sup>にぎ</sup>かさ。――だぶ／＼と湯<sup>ゆ</sup>の動<sup>うご</sup>  
く音<sup>おと</sup>。軒<sup>のき</sup>前<sup>さき</sup>には、駄<sup>だ</sup>菓<sup>くわ</sup>子<sup>し</sup>店<sup>みせ</sup>、甘<sup>あま</sup>酒<sup>ざけ</sup>の店<sup>みせ</sup>、飴<sup>あめ</sup>の湯<sup>ゆ</sup>、水<sup>みづ</sup>  
菓<sup>くわ</sup>子<sup>し</sup>の夜<sup>よ</sup>店<sup>みせ</sup>が並<sup>なら</sup>んで、客<sup>きやく</sup>も集<sup>あつ</sup>まれば、湯<sup>ゆ</sup>女<sup>な</sup>も掛<sup>か</sup>ける。  
髯<sup>ひげ</sup>が吸<sup>す</sup>る甘<sup>あま</sup>酒<sup>ざけ</sup>に、歌<sup>うた</sup>の心<sup>こゝろ</sup>は見<sup>み</sup>えないが、白<sup>しろ</sup>い手<sup>て</sup>にむ  
く柿<sup>かき</sup>の皮<sup>かは</sup>は、染<sup>そ</sup>めたさゝ蟹<sup>かに</sup>の絲<sup>いと</sup>である。

みな立<sup>た</sup>つ湯<sup>ゆ</sup>氣<sup>げ</sup>につゝまれて、布<sup>ぬの</sup>子<sup>こ</sup>も浴<sup>ゆ</sup>衣<sup>かた</sup>の色<sup>いろ</sup>に見<sup>み</sup>  
えた。

人<sup>ひと</sup>の出<sup>で</sup>入<sup>はい</sup>り――盛<sup>ひた</sup>り。仕<sup>し</sup>出<sup>だ</sup>しの提<sup>ちやう</sup>灯<sup>ちん</sup>二<sup>に</sup>つ三<sup>さん</sup>つ。紅<sup>あか</sup>  
いは、おでん、白<sup>しろ</sup>いは、蕎<sup>そば</sup>麥<sup>あへ</sup>。横<sup>よこ</sup>路<sup>ろ</sup>地<sup>ぢ</sup>を衝<sup>つ</sup>と出<sup>で</sup>て、  
やゝ門<sup>かど</sup>とざす湯<sup>ゆ</sup>宿<sup>せど</sup>の軒<sup>のき</sup>を傳<sup>つた</sup>ふ頃<sup>ころ</sup>、一<sup>い</sup>しきり静<sup>しづ</sup>かにな<sup>な</sup>つ  
た。が、十<sup>じゆ</sup>夜<sup>や</sup>をあての夜<sup>よ</sup>興<sup>こう</sup>行<sup>ぎやう</sup>の小<sup>こ</sup>芝<sup>しば</sup>居<sup>ゐ</sup>もどりに又<sup>また</sup>冴<sup>さ</sup>  
える。女<sup>によう</sup>房<sup>ぶどう</sup>、娘<sup>め</sup>、若<sup>わ</sup>衆<sup>しゆ</sup>たち、とある横<sup>よこ</sup>町<sup>ちやう</sup>の土<sup>ど</sup>堀<sup>ほり</sup>の小<sup>こ</sup>

路から、ぞろ／＼と湧いて出た。が、陸軍病院の慰安のための見物がへりの、四五十人の一行が、白い装でよざつたが、霜の使者が通るやうで、宵過ぎのうそ寒さの再び春に返つたのも、更に寂然としたのであつた。

月夜鴉が低く飛んで、水を潜るやうにい柳から柳へ流れた。

「うざくらし、厭な——お兄さん……」  
芝居がへりの過ぎたあと、土堀際の引込んだ軒下に、潜戸を細目に背にした門口に、月に青い袖、帯黒く、客を呼ぶのか、招くのか、人待顔に袖を合せ、肩つき寒くゝんだ、影のやうな婦がある。と、裏の小路からふらりと出て、横合からむずと寄つて肩を抱いた。其の押つぶしたやうな帽子の中の男の顔を、熟とすかして——然う言つた。「お門が違ふやるね、早う小春さんのとこへ行く事や。」  
と、格子の方へくると背く。

紙屋は黙つて、ふいと離れて、すぐ軒ならびの隣

家の柱へ、腕で目をおさへるやうに、帽子ぐるみ附  
着いた。

何の眞似やら、おなじやうな、あたまから羽織を  
引かぶつた若い衆が、溝を傳うて、二人、三人、胡  
亂々々する。

此時であつた。

夜も既に、十一時すぎ、子の刻か。――柳を  
中に眞向ひなる、門も鎖し、戸を閉めて、屋根も、  
軒も、霧の上に、苦掛けた大船の如く静まつて、梟  
が演戲をする、板歌舞伎の趣した、近江屋の臺所口  
の板戸が、から／＼からと響いて、軽く、迂ると、  
帳場が見えて、勝手は明い――其處へ、眞黒な  
外套があらはれた。

背後について、長補袷する／＼と、伊達巻ばかり  
に羽織と言ふ、しどけない寝亂れ姿で、しかも湯上  
りの化粧の香が、月に脈うつて、ぼつと霧へ移  
る。……と送つて出しなの、肩を叩かうとし  
て、のびた腰に、ボンと土間に反つた新しい仕込み

の鰯ぼらと、比目魚ひらめのあるのを、うつかり跨またいで、怯おびえ  
たやうな脛はぎしろ白く、莞爾にっこりとした女をんなが見みえる。

「くそつたれめ。」

見みえ透すいた。が、外套ぐわいたうが外そとへ出でた、あとを、しめ  
ざまに細ほつそりと見送みおくる處ところを、外套ぐわいたうが振返ふりかへつて、頬ほずり  
をしようとする、あれ人ひとが見みる、島田しまだを揺ふつて、  
おくれ毛げと、もに背そむいたけれども、弱よわ々となつて顔かほ  
を寄よせた。

此これを見みた治兵衛ぢへゑは何どうする。血ちは火ひの如ごとく鱗うろこを立た  
て、逆さかさまに尖とがつて燃もえた。

途端とたんに小春こはるの姿すがたはかくれた。

あとの大戸おほどを、金きんの額がくぶちのやうに背負しよつて、揚々やうやう、  
として大得意だいとくいの體ていで、紅閨こうけいのあとを——一散歩さんぽ、  
贅ぜいを遣やる黒外套くろぐわいたうが、悠然いっぜんと、柳やなぎを眺ながめ、池いけを覗のぞき、  
火ひの見みを仰あふいで、移香うつりがを惜をしげなく、醉よひざましに、月がつ  
の景色けしきを見みる牀さだの、其その行ゆく處ところには、返咲かへりざきの、櫻さくらが  
咲さき、柑子かうじも色いろづく。……他の旅館りよくわんの庭にはの前まへ、

垣根などをぶらつきつゝ、やがて總湯の前に近づいて、いま店をひらきかけて、屋臺に鍋をかけようとする、夜なしの餛飩屋の前に来た。

獺橋の婆さんと土地で呼ぶ、――此の婆さんが店を出すのでは……もう、十二時を過ぎたのである。

犬ほどの蜥蜴が、修羅を燃して、煙のやうに颯と襲つた。

「おどれめ。」  
と呻くが疾いか、治兵衛坊主が、其の外套の背後から、ナイフを鋭く、つかをせめてグサと刺した。

「うーむ。」と言ふと、ドンと倒れる。  
獺橋の婆さんが、まだ火のない屋臺から、顔を出してニヤリとした。串戯だと思つたらう。

「北國一だ――」  
と高く叫ぶと、其の外套の袖が煽つて、紅い裾が、はら／＼と亂れたのである。

「小春さん、先刻の、あの可愛い雛妓と、盲目の爺さんたちを此處へ呼び。で、お前さんが主人に成つて、皆で湯へ入つて、御馳走を食いべて、互に慰めもし、また、慰められもするが可い。」

治兵衛坊主は、お前さんの親たち、弟に逢つた事はないか。――なければ其も尚ほ都合。あの人たちに譯を話すと、おなじ境界にある夥間だ、よくのみ込むであらうから、爺さんをお前さんの父親、小兒を弟に、不意に尋ねて来た分に、治兵衛の方へ構へるが可い。場合によれば、表向き、治兵衛を此處へ呼んで逢はせるも可からう。あの盲ひた人、あの、いたいけな兒、鬼も見れば角がなごむ。――心配はあるまいものゝ、また間違がないとも限らぬ。其の後難の憂慮のないやうに、治兵衛の氣を萎し、心を鎮めさせるのに何よりである。

私は直ぐに立つて、山中へ行く。

故とらしいやうでもあるから、別室へと思はぬで

もなければ、さて然うして、お前は爺さんたちと、こゝに一所に。・・・決して私に構ふなど言つた處で、人情として然うは行くまい、顔の前に埃が立つ。構はないにしても氣が散らう。

泣きも笑ひもするがいゝが、どつちも胸をいたためまで、よく楽しみ、よくお遊び。」「――

あの陰氣な女中を呼ぶと、沈んで落着いたゞけに、よく分つて、のみ込んだ。此の趣を心得て、もの優しい宿の主人も、更めて挨拶に來たので、大勢送出す中を、學士の近江屋を發程つたのは、同じ夜の、實は、八時頃であつた。

勿論、小春が送らうと言つたが、さつきの今で、治兵衛坊主に封しても穩でない、と留めて、人目があるから、石屋が石を切つた處、と心づもりの納屋の前を通る時、袂を振切る。

お光が中くらみな鞆を提げて、肩をいからすやうに、大跨に歩行いて、電車の出發點まで眞直ぐに送つて來た。

道は近い、またすぐに出る處であつた。

「旦那さん、蚤にくはれても、女ツ子は可哀相だと言つたが、眞個かね。」

停車場の人ごみの中で、だしぬけに大聲でぶツツけられたので、學士は其時少なからず逡巡しつゝ、黙つて二つばかり點頭いた。

「旦那さん、お願だから、私に、旦那さんの身についたものを一品下んせね。鼻紙でも、手巾でも、よ。」

教授は外套を、すつと脱いだ。脱ぎはなしを、其のまゝお光の肩に掛けた。

此のおもみに、トンと壓されたやうに、靴を下へ置いたなりで、停車場を、ひよいと出た。まさか持つたなりでは行くまいと、半ば串戯だつたのに――しかし、停車場を出ると、見通しの細い道を、いま教授がのせたなりに、たゞ袖に手を掛けたばかり、長い外套の裾をずる／＼と地に曳摺るのを、其のまゝで、不思議に、悄乎と歸つて行くのを見て、をしげなくほろりとして手を組んだ。

發車した。



「―― お光は、夜の隙のあいてから、此を着て、嬉しがつて戸外へ出たのである。……はじめは上段の間へ出向いて、

「北國一。」

と、まだ寝ないで、其處に、羽二重の厚衾、枕を四つ、頭あはせに、身のうき事を問ひ、とはれ、睦言のやうに語り合ふ、小春と、雛妓、爺さん、小兒たちに見せびらかした。が、出る時、小春が羽織を上へ引つかけたばかりのなりで、臺所まで手を曳いた。―― あゝ、其の時お光のかぶつたのは、小兒の鳥打帽であつたのに――

黒い外套を着た湯女が、總湯の前で、殺された、刺された風説は、山中、片山津、栗津、大聖寺まで、電車で人とともに飛んで忽ち響いた。

けたましましい、廊下の話聲を聞くと、山中温泉の旅館に、既に就寝中だつた學士が、白いシイツを刎ねて起きた。

寢床から自動車を呼んで、山代に引返して、病院に移つたと言ふ……お光の病室の床に、胸を

しめて立つた時、

「旦那さん、―― お光さんが貴方の、お身代り。……私はおくれました。」

と言つて、小春がおもはゆげに泣いて縋つた。

「お光さん、私だ、榊だ、分りますか。」

「旦那さんか、旦那さんか。」

と突拍子な高調子で、譫言のやうに言つたが、

「ようこそなあ―― こんなものに……

面も、からだも、山猿に火熨斗を掛けた女だと言は

れたが、髪の毛ばかり皆が賞めた。もう要らん。小

春さん。あんた、油くさくて氣の毒やが、これを切

つて、旦那さんに上げて下さんせ。」

立會つた醫師が二人まで、目を瞬いて、學士に會

釋しつゝ、うなづいた。もはや臨終ださうである。

「頂戴しました。―― 貰つたぞ。」

「旦那さん、顔が見たいが、もう見えんわ。」

「さ、さ、さ、此に縋らつしやれ。」

と、ありなしの縁に曳かれて、雛妓の小とみ、弟

が、かはいゝ名の小次郎、ともに、杖まで戸惑ひし

てついて来て、泣いて居た、盲目の爺さんが、竹の

杖を、お光の手に、手さぐりで握らせるやうにして、

「持たつしやれ、縊らつしやれ。ありがたい佛様が見えるぞい。」

「あゝい、見えなく成つた目でも、死ねば佛様が見られるかね。」

「おゝ、見られるとも、なう。ありがたや阿彌陀様。おありがたや親鸞様も、おありがたや蓮如様も、それ、此の杖に蓮華の花が咲いたやうに、光つて輝いて並んでぢや。さあ、見さつしやれ、拜まつさしやれ。なま、なま、なま、なま、なま。」

「そんなものは見たうない。」  
と、ツト杖を向うへ匆ねた。

「私は死んでも、旦那さんの傍に居て、旦那さんの顔を見るんだよ。」

「勿體ないぞ。」

と口のうちに呟いて、爺が、黒い幽霊のやうに首を伸して、杖に縋つて伸上つて、見えぬ目を上ねむりに見据ゑたが、

「うんにや、道理ぢや。俺も阿彌陀佛より、御開山より、娘の顔が見たいぞいの。」

と言ふと、持つた杖を八たと擲げた。其の風采や、

さながら一山ざんの大導師だいたうし、一體たいの聖者せいじゃの如ごとく見みえたの  
であつた。

【完】